

## 妙法蓮華經如来神力品第二十一

爾の時に、千世界微塵等の菩薩摩訶薩、地より涌出せる者、皆仏前に於いて一心に合掌し、尊顔を瞻仰して仏に白して言さく。

世尊、我等仏の滅後、世尊分身所在の国土、滅度の処に於いて、当に広く此の経を説くべし。

所以は何ん。我等も亦自ら是の真浄の大法を得て、受持読誦し、解説書写して、之を供養せんと欲す。

爾の時に世尊、文殊師利等の、無量百千万億の旧住娑婆世界の菩薩摩訶薩、及び諸の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の、一切の衆の前に於いて、大神力を現じたもう。(326 頁 1 行～326 頁 8 行)

その時に、地中から湧き出て来た、千の世界を微塵にした数に等しい、悟りを求める志の高い菩薩達は、皆、仏の前で一心に合掌して、仏のお顔を仰ぎ見て、仏に向かって次のように言いました。

世尊、私達は、仏がこの世を去られた後に、世尊の分身のいらっしゃる国土や、仏が世を去られた所において、必ず多くの人々にこの経を説きます。

何故かと言いますと、私達も、この真実で清浄な、多くの人々を悟りへと導く偉大なる教えに、自ら触れ、受け入れ自分のものとなるよう読誦し、人にも伝え、書写し、その恩に感謝し報いる行いをしたいと願うからです。

その時に、世尊は、文殊師利などの無量百千万億の娑婆世界に昔から住む、

悟りを求める志の高い菩薩達及び、諸々の出家の男女、在家の男女、天人、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽、人間、人間ではないものなどの一切の大衆の前で、大いなる力を現わされました。

廣広長舌を出して、上梵世に至らしめ、一切の毛孔より、無量無数色の光を放って皆悉く徧く十方世界を照らしたもう。衆の宝樹下の、師子座上の諸仏も、亦復是の如く、廣長舌を出し無量の光を放ちたもう。釈迦牟尼仏、及び宝樹下の諸仏、神力を現じたもう時、百千歳を満す。

然して後に還って舌相を摂めて一時に警欬し、俱共に弾指したもう。是の二つの音声、徧く十方の諸仏世界に至って、地皆六種に震動す。

其の中の衆生、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等、仏の神力を以つての故に、皆此の娑婆世界、無量無辺百千万億の衆の宝樹下の、師子座上の諸仏を見、及び釈迦牟尼仏、多宝如来と共に宝塔の中に在して、師子の座に坐したまえるを見たとまつり、又、無量無辺百千万億の菩薩摩訶薩、及び諸の四衆の、釈迦牟尼仏を恭敬し圍繞したてまつるを見る。既に是れを見已って、皆大いに歡喜して未曾有なることを得。(326 頁 8 行～327 頁 9 行)

広く長い舌を出して、上は大梵天の世界にまで到達させました。一切の毛穴から無量無数の色の光を放って、みな悉く広く十方の世界を照らされました。多くの宝樹下の獅子座上の諸仏も、またこのように広く長い舌を出し、無量の光を放たれました。釈迦牟尼仏と、宝樹下の諸仏が神通力を現わされた期間は、百千歳も続きました。

そうして後に、長い舌を納めて、同時に咳をして、共に指を鳴らされました。この二つの音は、遍く十方の諸仏の世界に行き渡り、大地は全て六種に震動しました。

それらの世界の衆生、天人、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽、人間、人間ではないものたちは、仏の大いなる力によって、皆この娑婆世界の無量無辺百千万億の諸々の宝樹下の獅子座上に居られる諸仏を見、ならびに釈迦牟尼仏と、多宝如来とが、共に宝塔の中で獅子座に坐って居られるのを見、更に、無量無辺百千万億の悟りを求める志の高い菩薩達と、諸々の出家の男女と在家の男女が、釈迦牟尼仏を恭しく敬い、周りを右回りに歩く作法で礼拝しているのを見ることができたのです。

これを見終って、皆、未だかつて無い大いなる歓喜を得たのでした。

即時に諸天、虚空の中に於いて、高声に唱えて言わく、此の無量無辺百千万億の世界を過ぎて国有り、娑婆と名づく。是の中に仏有す。釈迦牟尼と名づけたてまつる。

今諸の菩薩摩訶薩の為に、大乘経の妙法蓮華、教菩薩法、仏所護念と名づくるを説きたもう。汝等当に、深心に随喜すべし、亦当に、釈迦牟尼仏を礼拝し供養すべし。

彼の諸の衆生、虚空の中の声を聞き已って、合掌して娑婆世界に向かって、是の如き言を作さく、南無釈迦牟尼仏、南無釈迦牟尼仏と。種種の華香、瓔珞、旛蓋、及び諸の嚴身の具、珍宝、妙物を以って、皆共に遥かに娑婆世界に散ず。

所散の諸物、十方より来ること、譬えば雲の集るが如し。変じて宝帳と成って、徧く此の間の諸仏の上に覆う。時に十方世界通達無礙にして一仏土の如し。

(327 頁 9 行～328 頁 7 行)

その時に、天人達は虚空中で、声高に唱えて言いました。この無量無辺無数百千万億阿僧祇の世界を過ぎて、娑婆という名の国があります。そこには仏が居られて、その名を釈迦牟尼と言います。今、多くの悟りを求める志の高い菩薩達の為に、妙法蓮華・教菩薩法・仏所護念（泥の中から華開く白い蓮華のような最も優れた巧みな教えであり、菩薩を教導する指針で、それが行じられる所は常に仏から見守られている）と呼ばれる大乘経典を説いておられます。あなた達は、心から共に喜ぶべきです。そしてまた釈迦牟尼仏に礼拝し、その恩に感謝し報いる行いをすべきです。

彼の諸々の衆生、虚空の中の声を聞き終って、合掌して娑婆世界に向かってこのように言ました。釈迦牟尼仏に心から敬意を表します。釈迦牟尼仏に心から敬意を表しますと。そして種々の花、香、珠玉を連ねた首飾りや腕輪、幟旗と笠、および諸々の身の飾り、珍奇な宝、素晴らしいものなどを、皆共に遥かな娑婆世界に向かって散じたのでした。

散じられた諸々の物は、十方よりやって来て、あたかも雲が集まるようでした。これらは姿を変えて宝のたれぎぬとなり、徧くこの空間の諸々の仏の上を覆いました。その時、十方の世界は、相互に礙げるものが無くなり、一つの仏国土の様に繋がったのです。

爾の時に仏、上行等の菩薩大衆に告げたまわく、諸仏の神力は、是の如く無量無辺不可思議なり。若し我、是の神力を以って、無量無辺百千万億阿僧祇劫に於いて、囑累の為の故に、此の経の功德を説かんに猶尽すこと能わじ。

要を以って之を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の経に於いて宣示顕説す。是の故に汝等如来の滅後に於いて、応当に一心に受持、読、誦、解説、書写し、説の如く修行すべし。

所在の国土に、若しは受持、読、誦、解説、書写し、説の如く修行すること有らん。若しは経巻所住の処、若しは園中に於いても、若しは林中に於いても、若しは樹下に於いても、若しは僧坊に於いても、若しは白衣の舎にても、若しは殿堂に在っても、若しは山谷曠野にても、是の中に、皆応に塔を起てて供養すべし。

所以は何ん。当に知るべし。是の処は即ち是れ道場なり。諸仏此に於いて阿耨多羅三藐三菩提を得、諸仏此に於いて法輪を転じ、諸仏此に於いて般涅槃したもう。

(328 頁 7 行～329 頁 7 行)

その時に仏は、上行等の菩薩の大集団に次の様に言われました。諸仏の大いなる力は、このように無量無辺で不可思議なのです。その私が、もし、この大いなる力によって、無量無辺百千万億阿僧祇劫の間、この教えを説き伝えるよう委ねる為に、この経のもたらす利益を説明しようとしても、決して説明し尽くすことはできない程なのです。

要するに、如来の一切の教え、如来の一切の自在な大いなる力、如来の一切の特別な教え、如来の極めて奥深い教えが、全てこの経において示され明らかに説かれるからです。だからこそ、あなた達は、如来が世を去った後に於いては、一心にこの経を、受け入れ自分のものとなるよう読誦し、人にも伝え、書写し、説かれている通りに実践すべきなのです。

この経を、受け入れ自分のものとなるよう読誦し、人にも伝え、書写し、説かれている通りに実践されている所には何処でも、経巻が安置されている所であれ、庭園の中であれ、林の中であれ、樹の下であれ、僧房であれ、在家の家であれ、殿堂であれ、山や谷や広野であっても、そこには必ず相応の塔を建ててその恩に感謝して報いる行いをすべきなのです。

その理由は何故でしょうか。しっかりと心得ておくべきですが、(法華経が実践されている) その場所こそが、悟りを得るための実践をする場所、すなわち道場だからです。仏達は、そこで阿耨多羅三藐三菩提という最高の悟りを得、そこで法を説き、そこで最終的な涅槃に入られたからです。

爾の時に世尊 重ねて此の義を宣べんと欲して 偈を説いて言わく 諸仏救世者 大神通に住して 衆生を悦ばしめんが為の故に 無量の神力を現じたもう 舌相梵天に至り 身より無数の光を放って 仏道を求むる者の為に 此の希有の事を現じたもう 諸仏警歎の声 及び弾指の声 周く十方の国に聞こえて 地皆六種に動ず 仏の滅度の後に 能く是の経を持たんを以っての故に 諸仏皆歡喜して 無量の神力を現じたもう 是の経を囑累せんが故に 受持の者を讚美すること 無量劫の中に於いて

すとも 猶故尽くすこと能わじ 是の人の功德は 無辺にして窮りあること無けん  
十方の虚空の 辺際を得べからざるが如し (329 頁 7 行～330 頁 4 行)

その時に世尊は、もう一度、その意味を説明するために詩の形で次の様に言われました。

世間を救う者である諸仏は、常に大いなる力を用いて、衆生を悦ばせるために、限り  
ないお力をお示しになるのです。舌先は梵天の世界にまで至り、身からは無数の光を放  
って、仏道を求める者の為に、このような稀有な事象を現わされるのです。諸仏の咳払  
いの声、及び指を弾く音が普く十方の国に聞こえて、大地は皆六種に震動するのです。  
仏がこの世を去られた後も、よくこの経の教えを自分のものにして忘れないが故に、諸  
仏は皆歡喜して、無量の大きい力を現わされるのです。この経の教えを説き伝えるよ  
う委ねる為に、この経の教えを自分のものにして忘れない人を賛美することを無量劫の  
間行おうとしても、なお讚美し尽くすことは出来ないのです。そのような人がもたらす  
利益は、無辺であり限りがありません。十方の虚空に果てが無いのと同様です。

能く是の経を持たん者は 則ち為れ已に我を見 亦多宝仏 及び諸の分身者を見  
又我が今日 教化せる諸の菩薩を見るなり 能く是の経を持たん者は 我及び分身  
滅度の多宝仏をして 一切皆歡喜せしめ 十方現在の仏 並びに過去未来 亦は見亦  
は供養し 亦は歡喜することを得せしめん

諸仏の道場に坐して 得たまえる所の秘要の法 能く是の経を持たん者は 久しか  
らずして亦当に得べし 能く是の経を持たん者は 諸法の義 名字及び言辞に於いて  
樂説窮尽無きこと 風の空中に於いて 一切障礙無きが如くならん 如来の滅後に於  
いて 仏の所説の経の 因縁及び次第を知って 義に随って実の如く説かん 日月の  
光明の 能く諸の幽冥を除くが如く 斯の人世間に行じて 能く衆生の闇を滅し 無  
量の菩薩をして 畢竟して一乗に住せしめん

是の故に智有らん者 此の功德の利を聞いて 我が滅度の後に於いて 斯の経を受  
持すべし 是の人仏道に於いて 決定して疑い有ること無けん

(330 頁 4 行～331 頁 4 行)

良くこの経を自分のものにして忘れない者は、既に私（釈尊）の姿を見、また多宝仏  
及び諸々の私の分身の者を見、また私が今日教化している諸々の菩薩達を見ているの  
です。

良くこの経を自分のものにして忘れない者は、私と私の分身、既に世を去っている多  
宝仏を悉く皆歡喜させ、今、十方に居られる仏、並びに過去と未来の仏を見、その恩に  
感謝して報いる行いをして、彼らを喜ばせることができるのです。

諸仏が道場に坐して悟られた滅多に説かれること無い特別な教えを、良くこの経を  
自分のものにして忘れない者は、遠くない未来においてまた聞くことができるのです。

良くこの経を自分のものにして忘れない者は、諸々の教えの意義を、文字やことばの  
使い方、人々の求めに応じて喜んで巧みに説き分けることができ、その能力の果てし

ないことは、風が空中において、一切の妨げがないのと同様でしょう。如来が世を去られた後に、仏が説かれた経の、趣旨と方法論とを知り、教えに従ってありのままに説くでしょう。太陽や月の光が 暗闇を除くように その人は、人々の中で教えを實踐し、衆生の迷いの闇を滅し、数限りない菩薩達を、すべての人が最後には仏の悟りへと導かれる一乗に留まらせるでしょう。

この故に智慧ある人は、このような利益もたらす行いの有益さを聞いて、私が世を去った後には、この経の教えを必ずや自分のものとして忘れないようにすべきです。

そうすれば、その人の仏道における決意は不変なものになることは疑いのないことです。